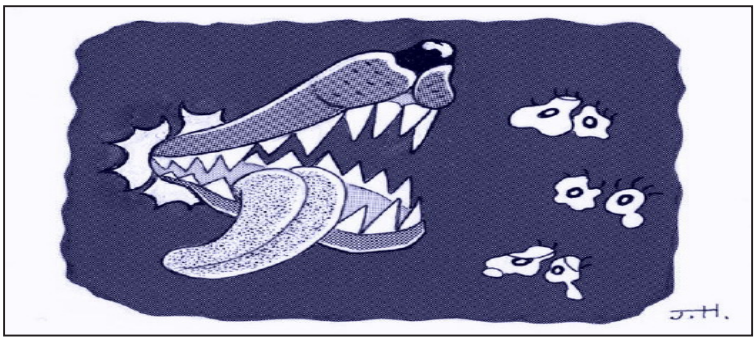
味の記憶

すきやきバトル

―文学と食を愛するハイパー編集記者・ぼのぼ氏の、わくわくエッセイコラム。忘れられない子供時代の味の数々と共に、昭和の悪ガキがよみがえる！



イラスト：服部淳子

●希望をつなぐ SUKIYAKI

昨年の紅白歌合戦では東日本大震災にみまわれた被災地へ希望をつなぐ「復興ソング」がオンパレードであった。その中にはあの昭和の名曲、坂本九の「上を向いて歩こう」も。この名曲は「Sukiyaki」という英語タイトルが付けられ、米ビルボードチャート1位を獲得した唯一の日本発ポップソングである。

英語タイトルを「Sukiyaki」としたのはいいえて妙だ。何といっても「すき焼き」は、戦後高度成長期の家族団欒の食卓には欠かせない特別な時に供する晩餐メニューであったからだ。サラリーマン家庭では給料日やボーナスが出た時など家族にとって景気のいい話が舞い込んできた時に、「今日はすき焼きか」となる。

日本食としては新参者で、幕末期、京都三条河原に「すき焼き屋」が初めて誕生した。明治に入ると明治天皇が牛肉を食べた事がきっかけで庶民にも牛肉を食す事が解禁され、関西地方では「すき焼き」、関東地方では「牛鍋」として庶民に広まった。

「すき焼き」と「牛鍋」の違いは、関東風はみりん・醤油・酒・砂糖などを調合した割り下を使って肉と野菜を同時に煮る。関西風はまず肉を焼き、砂糖と醤油で好みの味に調え、その後野菜を入れていく。割り下を使わず、煮詰まったら酒や水をさして味を調整するのだ。

しかし今は、関西の「すき焼き」と関東の「牛鍋」が融合し、割り下を使う「関東風すき焼き」が普及している。一九二三年の関東大震災で関東の牛鍋屋は大被害を受け次々に姿を消し、代わって関西のすき焼き屋が関東へ進出し、関西の「すき焼き」が関東地方でも広まったからだ。因みに、溶き卵をつけて食べる事は東西共通しているようだ。

私の実家では伝統的な関西風の作り方で、割り下を使わず、まず肉を焼き、砂糖と醤油を入れて味を調え、そこに野菜や豆腐、しらたきなどを加えていた。

ところで、このすき焼きを食べる時につい思い出すのが小さい頃の犬騒動だ。2歳から6歳まで育った広瀬の記憶の中でも強烈に焼き付いている。

●和製バルドーがやってきた

我が家は、中学校の運動場を囲む土塁に沿って水溝が走る向う岸側、防風林に囲まれた一画にあった。裏手が小山と藪林に囲まれた一画には、五戸程の農家風の家屋がそれぞれに小畑と庭先、物置小屋を配して立ち並んでいていた。それぞれの家屋は五右衛門風呂に台所は竈がついた土間があり、やけにだだっ広いが、当時の教職員や国鉄、保健所職員などの公務員向けの住宅として自治体が借り上げていた。

その中の三戸は大きな一棟を各戸で仕切り、庭先や小屋がそれぞれについていた。その大きな一棟と垣根と小道をはさんだ奥に我が家があった。もう一戸は大きな一棟をはさんだ我が家の反対側、南西方向に、畑と小道を挟んで少し離れてあった。

この離れ屋だけは公務員向けの住宅ではなく、子供好きの老夫婦が長らく住んでいた。私たち悪ガキ連が外で遊びまわっていると、畑いじりをしていた老夫婦が、何くれとおやつなどをふるまってくれた。その親切なおじいさんがやがて病気で亡くなり、一人残されたおばあさんは息子夫婦のもとに引っ越していった。それからまもなくして代わりにハイカラな若夫婦が入居した。実は後でわかったことだが、一見若夫婦に見えたカップルは、実は本当の夫婦ではなく内縁関係にあった。平たく言えば妾宅としてこの家を借りたのだ。

男性がこの家にやってくるのは週に一日か二日程度で、いつもは女性だけが一人住んでいた。

犬騒動はこの離れ屋で飼っていた大きなシェパード犬を巡る騒動である。私が5歳か6歳の頃のことだ。

女性の方は見るからに周りのおかあちゃん連とは違い、水商売風の派手作りで、年齢もかなり若かった。夏場は派手な花柄のムームー姿に白い肌がまぶしく、茶赤に染めた髪の毛はボリュームたっぷりのパーマヘアで、ブリジッド・バルドーがかつてしていたショートスタイル。顔のつくりは目許が涼しく鼻筋も通った小づくりの大和なでしこ風の美人顔だが、真っ赤な口紅に彩られたちょっと大きめの口許が、彼女の活発な気性を表している。日傘をさして買い物に行くグラマラスな姿は、小さな町だからやけに目立つ。周りは子供たちのいる公務員家庭ばかりだから、波風がたつことはいうまでもない。

公務員住宅の親たちは子供たちがその家に近づくのを厳に禁じた。しかし、もとは老夫婦が住んでいたから、悪ガキ連も勝手知ったる家。親たちに禁じられれば禁じられるほど、新参者になおさら好奇心がわくというものだ。で、親たちの目を盗んではその離れ屋に偵察にいった。

最初は遠い生垣からのぞくが、そこからでは中の様子はわからない。

「お前行けや」

「お前こそ行け」

マサアキと私で言い争っていると、後からやってきた兄が、

「どーれ、俺が偵察してきてやる」

と、すたすたと敷地内に入っていく。こういう時の兄の動きはとても素早い。兄は彼女と玄関先で何かこちょこちょと会話していたが、そのまま家に上り込んでいった。しばらく待てども兄が出てくる気配はなし。取り残された私とマサアキ、そしてマサアキの兄のシゲキはおそるおそる敷地内に入っていった。すると、彼女が

「何してるの？　あんたたちも入んなさい」

と玄関先から顔を出して声をかけてくれた。無遠慮に家の中を覗き込もうとする悪ガキ連にも嫌な顔一つせず、意外にも歓待してくれたのだ。

家の中は、洋画に出てくるようなソファと絨毯が敷き詰められていた。老夫婦が住んでいた時とはすっかりインテリアが変わり、もともと農家風の和風造りの家なので、そのコントラストがかえってモダンに映る。客間の応接用のソファーには兄がすでに陣取っていて、テーブルの上に盛られたアイスキャンデーや米国産のチョコレートやキャンデーに手を伸ばしてぱくついている。

「あんたたちも遠慮なく食べていいのよ」

と彼女が開けっ広げに声をかけてくれた。

子供たちにとっておやつを存分にくれる大人は、それだけでいい大人である。おまけにすごろく遊びやトランプ、そしてチェスなど、それまで子供たちが知らなかったいろんなゲームを教えてくれた。最初は恐る恐る様子をうかがっていた悪ガキ連も、たちまち彼女の虜となってしまった。

部屋には当時は珍しいステレオがあり小林旭や石原裕次郎の流行歌が大音響で流れていた。しかし、その華やかな趣の部屋には不釣り合いな形で壁に鹿の頭の剥製がかけられ、その下に猟銃が二挺つるされていた。そこだけが不気味さを漂わせ、彼女のパートナーの存在を否応もなく想起させた。

〈きっとコワイおじちゃんなんじゃ〉

悪ガキ連は、スポーツ刈りの精悍な顔つきの男性の風貌を想起し、男性が居るときは家にはめったに寄り付かなかった。

ともかくも、すっかり彼女のファンになった四人。親の目を盗んでは、またパートナーの男性がいない時を選んで、その家にちょくちょく入り浸るようになった。それが頻繁になれば母親たちが気づかないわけがない。

「あそこに行ったらいかんと言ったやろ」と、親たちにこっぴどく叱られる。

しかし、彼女の大人の色気は子供にとっても魅力満点、抗う術なし。懲りずに足繁く通っていると、それに気づいた姉が最初は「いやらしい」と反発

していたが、やはり、離れ屋の彼女と男性の関係が気になるらしく、姉は姉で密かに偵察に行ったようだ。そして、彼女からお化粧の仕方や三つ編みの仕方、アクセサリーのつけ方、綾取りなどを直伝されるうちに、またしても彼女の虜となってしまった。さらに、姉と共にマサアキとシゲキの妹であるマユミ、マサアキらの棟続きに住んでいるヒトミまでも、その家に頻繁に行くようになったのだ。

　そうなると、男どもより女たちの方が母親たちへの情報伝達は巧妙で早い。一見派手な水商売風の謎の女性が実は子供好きで親切であるということが親たちにも伝わることとなる。実際に近所で親たちが彼女と会っても気さくに挨拶を返すし、親たちの警戒心も次第に溶け、間もなく忌憚のない近所付き合いが始まった。やはり大人の付き合いは、プロセスを経るのにそれなりの時間がかかる。

　その中で詮索好きなヒトミの母親は彼女の氏素性を探ろうとする。

「どうも神戸の方から来たらしい」

「だんなはパイロットらしいわ」

「いや、航空自衛隊の人じゃと」

　子供たちにも少しずつ彼女のベールがはがされていく。近所の大人たちは大方のことは把握しているようだが、子供の前では憚られることは言わない。だから、それ以上のことは知りようがないが、むしろ謎がかった部分が多いほど、子供たちにとっては魅惑の人になりおおせる。

〈謎の美女！〉

　その響きこそ子どもの想像力を存分に掻き立てた。

●浮気防止の番犬にシェパード登場

　開放的で蠱惑的な彼女の振る舞いは、やがて近所だけでなく町中にふりまかれることになる。御用聞きのお兄さん、そして中学生や高校生、はたまた商店街のおじさんたちも、たちまち彼女のファンになった。悪ガキ連が遊びに行ったとき、たまたま彼女のネグリジェ姿を見て子供ながらにもドキッとしてしまうくらいだから、大人の男性が目移りしないわけがない。要するに女の色気むんむんなのだ。

　やがて、彼女の家に見知らぬ男性がちらほらやってくるようになった。昼間のことでそんな長い時間ではない。しかし、何やら艶めいた雰囲気で、そうなると近所の母親たちもまたまた警戒する。我々悪ガキ連も大いに気になるところだ。それで、遊びに行くふりをしてこそっと偵察に。

「お前行けや」

「お前こそ行け」

　再びマサアキと私で言い争っていると、「あら、どうしたの？　おやつ食べる？」

　と、いつものように我々を家に上げておやつをふるまってくれた。訪問中の男性は少し迷惑そうである。私たちはおやつを食べながら大人二人の会話に聞き耳を立てるが、普通の世間話をしているようだ。間もなく、男は女性宅を辞する……。

「浮気ばしとるんじゃないみたいや」

　マサアキと私は少しほっとした気分で耳打ちし合った。

　そういうことがしばらく続いた後、離れ屋に突然、やたらと大きなシェパードがやってきた。彼女のパートナーの男性が自分の留守中は不用心だということで、番犬を飼うことにしたのだ。何でも警察犬になりそこなった犬で保健所から貰い受けてきたらしい。

　このシェパードがそれは大きな恐ろしい犬で、離れ屋の敷地に私たちが少しでも近づこうものなら、とにかく狂ったように吠えまくる。パートナーの男性が彼女の浮気防止に買ったのではないかと思えてならない。

　そのとばっちりで、我々もおいそれと彼女の離れ屋に近づけなくなった。小道から垣根と畑、庭先を挟んで犬が繋がれている場所までは優に１００ｍはあるが、今にも繋がれているロープを切って飛びかかってきそうな勢いである。おかげでわれら住宅地から表の街道に出る小道を通る時は、必ず吠え

まくられる。それが日常の事となったのだ。

「ふつうシェパードは賢いもんやけど、あれはほんとにバカ犬じゃわ」

と子供たちの間で大型シェパード犬の評判は散々であった。

●犬騒動の発端

〈せっかく、格好のおやつスポットが出来たというのに、あのバカ犬が邪魔をする〉

気楽に離れ屋に遊びに行けなくなった悪ガキ連は、腹いせ交じりに大型犬を垣根越しにはやし立てるようになったが、そんなことをしていると、激しく吠える犬を抑えようと、離れ屋から女性が出てくることも。そして、私たちを見つけては

「激しく吠えてごめんなさいね」

と、家に手招きしてくれることもあった。毎回そうなるとは限らないが、十回に一回はそうなる。それに味を占めた悪ガキ連が思いつく悪知恵は一つ、

〈バカ犬をできるだけ激しく吠えさせれば、おやつにありつけるかもしれない！〉

というものである。

その日もいつものように大型シェパードを囃し立てていた。悪ガキ連たちの親たちは外出中で、いるのは子供たちだけ。みんな目いっぱい外で遊んでいるからすぐにお腹がすく。で、彼女の家でおやつをもらおうと皆の相談が整い、一斉に犬を垣根越しに囃し立てることになったのだ。

「やい、バカ犬」

「悔しかったらここまで来んかい」

マサアキと私は、離れ屋の敷地に少し踏み入れ、調子に乗って後ろ向きに半ケツを出して尻を振りながら囃し立てた。

シゲキとマユミはなぜか赤いハンカチを取り出してぶんぶん振り回している。闘牛ではないのだからそんなことをしても効果があるわけはないが、何しろバカ犬の事、いつものように気が狂ったように吠え始めた。私の兄と姉は少し離れてにやにや笑っている。今日は悪ガキ連の人数が多い分、囃し立てる威勢もよい。それに応じて、シェパード犬の吠えた方もこれまた激しさが尋常ではなかった。

〈早くお姉ちゃんが出てこんかな？〉

離れ屋の女性は若かったから悪ガキ連の間では「お姉ちゃん」と呼ぶことにしていた。そう呼ぶ方が彼女も嬉しそうで、結果的にふるまわれるおやつもゴージャスになるのだ。子供たちはそういった媚を売ることには抜け目がない。

だが、その日は折悪しく彼女は外出中であった。そうとも知らずにいっそう調子に乗ってシェパード犬を囃し立てたが、一向に出てこないお姉ちゃんに皆もだんだん焦れてくる。犬は犬で吠え方が最高潮に達していた。だんだん皆も不安になってきた。

「もういい加減にせんね。それ以上やると……」

いつものように小賢しく皆を引き留めるヒトミの声。

するとその時だ。大きな丸太の杭に太いロープ綱で頑丈に繋がれていたはずの綱が無情にも切れたのだ。

「ひえー、皆逃げろ～」

兄のひときわ大きな叫びが後方からこだました。裏手が山に囲まれているので、こだまになって返ってきた。

●犬騒動の発端

それからは皆一目散、我が家に向かってほうほうの態で駆け出した。ある者は縁側から、ある者は玄関から、そして勝手口からと、それぞれが必死の形相で逃げ込んだ。後ろからバカ犬が猛突進で太いロープを引きずりながら追いかけてくる。当時の我が家は、縁側からでも勝手口からでも開けっ放しだから簡単に入れるのだ。

「お前たちはそっちの部屋の押し入れに隠れろ。マサアキとシゲキは右に

回り裏の納戸部屋に行け」

と兄は叫び、家をぐるりと周り勝手口の方へ向かう。私と姉とマユミは、兄の指示通り引き戸の玄関を入って上がり間の左手にある押し入れに逃げ込んだ。マサアキとシゲキ兄弟も、縁側から部屋に駆け込み、右手の大広間裏手にある納戸部屋に逃げ込んだ。ヒトミの行方は分からなかったが、後で知ったところでは、一番近くにあった自分の家の物置小屋に逃げ込んだようである。

我々が家に逃げ込むや間もなく、大型のシェパードは狂ったように吠えながら何と縁側から家の中に侵入してきたのである。そして部屋という部屋を駆けずり回り、私たちが隠れていた押し入れの前にもやってきた。

大きな唸り声がふすま越しに響く。三人とも生きた心地がしない。必死に襖戸の取っ手を三人で開かないように押さえる。今にも襖戸を押し破って入ってきそうである。絶体絶命のピンチだ。と、まもなく大型犬は右手の部屋に走り去っていった。家の反対側から「ひぇー」とシゲキとマサアキの叫び声がした。

どうやら二人は納戸部屋の階段から屋根裏部屋に逃げ込み、上がってこようとするバカ犬を近くにあった箒で必死に追い払っていたようだ。そして再び猛犬は私たちが避難した押し入れの前にやってきた。押し入れにぶつかるように吠えまくる。一部襖紙が破れて至近距離で大型犬の顔がのぞく。三人は心臓が破裂そうになった。猛犬は再び納戸部屋の方にとって返し、マサアキとシゲキとの格闘が続く。そうこうすること三〇分程、すっかり家の中を蹂躙したバカ犬は、家の外に走り去って行った。

しかし、兄の声がしないのはどうしたことだろう。兄はいったん家の中に勝手口から入ったが、これはやばいと、バカ犬が家の中を蹂躙している隙をみて、いち早く家の裏手から抜けだし中学校の運動場の方面に避難していたのだ。そして、そこにいる男子学生たちに助けを求め、剣道の防具をつけた男子学生たちを我が家に連れてきた。その気配を感じてか、猛犬は表に逃げた。間もなく離れ屋の男性が女性と一緒に帰ってきて、猛犬を捕まえてくれたのである。これが犬騒動の顛末だ。

●お詫びに特上の神戸牛ですき焼き

夕方に母が帰ってきた。間もなく中学校の生徒から事の顛末を聞いた教師である父も帰宅した。不肖の子供たちの行儀の悪さは日頃から知っているから、大広間にみな正座させられ、犬をからかったことを叱られた。追い打ちをかけるように母親からは「今日は飯抜きかな」と無情の宣告。すっかりしょげ返る三人。しかし、救いの主はいるものだ。離れ屋のカップルがお詫びかたがた、特上の神戸牛を特盛で持ってきたのである。彼らから事の顛末を聞いた両親は、わが子たちの所業を大目にみることにして、晩飯はすき焼きとあいなった。

犬騒動ではまるで生きた心地がしなかったが、おかげで大好物のすき焼きにありつける。ましてや特上の神戸牛、三人はすっかり元気を取り戻し、両親もどこか嬉しそうである。

我が家では、すき焼きに限っては父親が鍋をしこむ。まずラードを入れて牛肉を赤みが残っている程度に軽く焼き、素早く砂糖と醤油、酒を少々加え、それから好みの野菜と豆腐、しらたきなどを鍋に入れる。てきぱきとした手さばきは父親の方が得意で張り切る。母親は料理係りの任を解かれ、それがまた嬉しいようだ。

さて、家族ですき焼きとなれば、油断できないのは六歳上の兄と三歳上の姉。小さい私は食べるのが遅く、肉にありつくにも極めて不利。兄弟のすき焼きバトルが始まるのだ。負けるものかと禄に噛まずにのみこめば、後で不消化で腹痛を起こし、きまって小児科に駆け込むことになる。

しかし、この日は皆が食べきれな

いくらいの特盛の牛肉があった。競う必要もなくゆっくり食べられる。こんなに幸せなことはない。そして平和なこともない。

父がおもむろに牛肉を入れながら

「しかし、今日は大変やったな」

と私たちに向かって口を開く。

「うん、二人を押し入れに避難させて、僕がいち早く中学生を呼びに行ったとよ」

と得意げに答える兄。その間も箸の休まる暇はなく的確に肉をすくい上げていく。

〈自分らを犬のおびきよせ役にして、その隙に兄は逃げたようにも思えるが……〉

一抹の疑問が湧く私に母親が肉を拾い上げて入れてくれた。「もう、無茶しちゃいかんからね」

諭す声もいつもよりはどこか優しげだ。すき焼きは皆の心を寛大にするのか、すき焼き様々である。姉はマイペースで黙々と膳に向っている。いつものような兄の箸さばきを監視する厳しい目つきはない。驚天動地の災厄を逃れたあとの一日の終わりとしては、これほどのハッピーエンドはない。

●後日譚

その日の夕餉はヒトミの家でもマサアキの家でもすき焼き鍋だったとか。離れ屋のカップルが特上の特盛の神戸牛を詫びに持ってきたからだ。おかげでどの家でも両親にこっぴどく叱られることはなかったという。やはりすき焼き様々である。

ところで、騒動を起こした大型シェパード犬は保健所に引き取られることになったが、その前に病気で亡くなった。

どうやらヒトミの母親が犬のえさにトリカブトをしこんだようである。ヒトミから犬騒動の顛末を聞いた母親がすっかり憤慨し、バカ犬をひどく忌み嫌ったからだ。我が家で飼っていた猫も、ヒトミの家に行ってはタンスの裏などにおしっこをするから、こらしめにちょっと毒を盛られた。以来、目やにが激しくなかなか治らなかったが、そのことはヒトミから直接聞いた。そういうわけだから、今回も同じに違いないのだ。普段は快活なおばさんが平気な顔で毒を盛る。今思えば強烈な話である。あな恐ろしや。

離れ屋のカップルはそれからしばらくして引っ越していった。消息通のヒトミの母親の話では、男性が自衛隊をやめて二人で神戸に行ったということだ。男性には別居妻がいて長らく離婚係争中だったが、その間に恋仲になったのが離れ屋の女性であった。宮崎に赴任することになった男性を追いかけて神戸から宮崎に来たらしい。男性はようやく離婚が成立して彼女と再婚することになった。それを機に自衛隊職を辞職することになったという。

まあ、子供たちにとっては、そんなややこしい話はどうでもよい。とてもきれいなお姉さんが引っ越してきて、飼っていた大型シェパード犬とみんながバトルして、美味しいすき焼きにありついたということ、その強烈な物語しか残っていない。

今でもすき焼きを食べると、その時の強烈な思い出が鮮明に蘇る。（了）